

今野 厚子（国語学・国文学）

天皇と和歌 —三代集の時代の研究—

本論文は、平安時代の和歌（具体的には『古今』、『後撰』、『拾遺』の三勅撰和歌集、すなわち「三代集」時代、の和歌）について、「天皇」という、従来あまり重視されなかった視点から、綿密な検証を行ったものである。平安時代以降の和歌は、『古今集』に始まる勅撰和歌集の編纂事業に象徴されるように、制度としては天皇と不可分の関係を持ちつつ展開・継続した。しかしながら、従来の平安和歌研究では、六歌仙や『古今集』撰者とといった文学史上著名な歌人についての研究や貴族社会における歌壇についての研究が主流を占め、勅撰和歌集の下命者たる天皇その人の和歌および歌集についての研究はどういうわけか乏しく、またその資料すなわち天皇自身の歌集の残存もきわめて少ない。

本論文は、この点に注目し、今日、平安時代の奈良帝、光孝、宇多、醍醐、朱雀、村上、冷泉、円融八代の天皇の歌集を収めて宮内庁書陵部に蔵されている写本三部、すなわち『代々御集』、『奈良御集』、『亭子院御集』について、各集の成立状況についての考察、さらにその三本相互の関連および三本所収歌と勅撰集をはじめとする他の歌集所収本文との綿密な比較検討等を行って、天皇の歌を等閑視してきた従来の和歌史研究が見逃してきた様々な事実を明らかにした。

その成果の一端を挙げれば、本論文第一部「天皇と私家集」においては、天皇の歌集いわゆる「御集」中、『代々御集』所収の奈良帝、光孝、宇多および円融各天皇の集の成立が従来考えられてきた時期より遙かに遡ることを明らかにし、さらにそれらの集の編纂者について具体的な推定を提示した。また、書陵部蔵の三御集に唯一共通して収められる宇多天皇の『亭子院御集』三本を比較・検討して三伝本それぞれの性格の相違を指摘し、醍醐天皇の『延喜御集』が『源氏物語』の素材、表現に密接な関連を有することを指摘した。ついで第二部「御集の和歌とその周辺」では、村上天皇の女御であり女流歌人としても著名な斎宮女御の『斎宮女御集』について、共通歌を多く含む『村上天皇御集』と対比・検討することによって、伝本系統の複雑な『斎宮女御集』各伝本の性格解明を試み、また歌物語『大和物語』冒頭の宇多天皇と女流歌人伊勢の歌についての異伝発生について、『亭子院御集』諸本を活用した新鮮な考察を示した。さらに第三部「天皇と勅撰集」では、御集を離れて、花山天皇によって撰せられた古今、後撰につぐ三番目の勅撰和歌集『拾遺集』の成立とその内容に対する花山天皇の関与の実態を、周辺資料のみならず、皇統において傍系に転じた花山天皇の微妙な宮廷社会における立場との関連で斬新な論を展開した。

本論文の論述は、従来の和歌研究にありがちな情緒的、鑑賞的な文言を極力排し、歴史的事実、客観的データに基づく考証による論述の展開によって、文学史研究者のみならず日本史研究者をも納得させるものである。ただ惜しむらくは、客観性を重視する余り、各章節において図表の多用が目立ち・読者にいささか読解上の負担を強いている。しかし、本論文が「天皇」という従来正面に据えられることのなかった視点から、平安時代三代集時代の和歌史に鋭い分析のメスを入れ、さまざまな新見・新説を提示したことは、研究史上高く評価することが出来る。

以上により、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位:を授与されるに十分であると認めた。